

エッセイ

私が見てきた大日本帝国

# よもやま話

山本文子

## 第一部 思い出話

来月、私は満八十五歳になる。よくぞ八十五年も生きてきたものだ、と自分で驚いている。小学校卒業時のクラスメイト（女子）は四十四人だった。そのうち私を含めた六人が同じ通学団に属し、田舎道を仲良く並んで登校したけれど、その五人はもつけない。一番の早死は十代に空爆死。次が二十代で病死。三番目は六十代に病死。そして四、五番目は七十代で病死と老衰死。残るは私だけ。耳こそ遠いが元気でこの頃は杖も使わず歩き回っている。小走りなら

走ることもできる。額の辺りの髪が白っぽくなってきたけれど、背筋は真っ直ぐである。小学校のクラス会では「文子さん、大きくなったねえ」と口々に言われたものである。奥手のため小学校入学時の身長百五センチ、女子の中で一番の小柄だったのが、二十歳では人並になり、七十代にはクラス会に集まった十人の中で、「一番に大きい方だった。骨量の密度が高いのは成長期にがむしやら働き続けてきたことと関係があるのでは？」長く生きた分だけ、思うことが増えた。それをとりとめなく書き連ねてみたい。

### 少女時代の思い出

私は、いくらかの貸付地も所有する自作農家に生まれ育った。五人兄弟の真ん中で姉兄弟妹そして、祖父母、父母と全部揃った九人家族だった。小学生の頃に母が言った言葉は忘れられない。

「上の二人、男と女と一人ずつおればいい。あとはいらん子じゃ」

それを聞いても私は別に驚かなかった。現実に上の二人は何かにつけて大事にされていたが、我が家に限ったことではなくて、それが当時つまり大日本帝国時代の日本社会の風潮だった。「旗本の三男坊」の言葉が示すように長子が重んじられ、末っ子は可愛がられ、真ん中は労働者扱いといった形に差別されるのは珍しいことではなかった。大日本帝国は人間にも職業にも上下格差をつける愚かな国家だった。働く者を卑しい身分とする歪んだ価値観がまかり通っていた。それだけでも私は大日本帝国を嫌悪せずにおれない。

のちに私自身が四児を育てる身になって、親の立場の大変さが実感できた。「三人子持ちは子地獄」の諺はまさに実相だと思う。確かに三人目からが大変だ。幼稚園児を頭に三児を抱えた時の私は一人を背負い、一人の手を引き、

長子の幼稚園の送迎当番をこなしてきた。食事の後お茶碗を洗っている暇もなかった。後回しになる。多忙極まりないためにイライラして怒りっぽくなる。私は実によく怒る母親だった。大変さのあまりそうなってしまったが、四人のどの子もいらん子だと思っただけではない。でなかったら四人目まで生みはしなかったから。

子供時代に話を戻そう。八歳のとき妹が生まれたので、妹の首がすわってから歩き出すまでの間はよくおんぶのお守りをさせられた。小柄な私には赤ちゃんがずっしりと重かったし、背中におしっこが漏れてきたこともある。お守りする弟妹がいなくて身軽に縄跳びができた二人の遊び友達は、いまになってみると、まるで幸せの先取りをしたみたいに私より先に逝ってしまった。人間の幸せは、生涯を通してトータルで見なければ分らない。辛い時を経たからこそ、私は今がとても幸せに思えるのである。

あれは私が九歳の初夏だったと思う。庭先いっぱい干してあった麦穂を片付け終わった午後、疲れた体を休めようと縁側に腰掛けた。そしたら、その私を目掛けて部屋の中から這い這いをして近寄ってきたのは妹である。私の背に捉まり立ちをして肩に手をかけた妹は、チィチャーネエ、プーワ。チィチャーネエ、プーワ」（小さい姉さん、おん

ぶして」とおんぶをせがんだ。首筋に柔らかく触れた小さな手の感触と、片言がなんとも可愛らしく思えた。姉でも母でも祖母でもなくて、この私を慕ってくれることがとても愛おしく思えた。だから辛くてもお守りは決して嫌ではなかった。

昔の農家は、風呂場から数メートル以上離れた所に井戸があった。この井戸の水をバケツに汲み入れて風呂まで運び入れるのが九歳ごろから私の役目になった。小型バケツで四十回くらいを汗だくになって運んだ記憶がある。やがて体の成長に伴い、両手それぞれに大型バケツを下げて運べるようになり、運ぶのが数回に減ってずいぶん楽になった。縁側と台所と離れの雑巾がけも私の仕事だった。女学生になると同時に炊事が加わった。

大日本帝国時代の私は工場に学徒動員される以前でも、予習、復習の家庭学習をまったくといっていいほどやったことがない。昼間の労働で疲れ果てて眠くなってしまい勉強どころではなかったからである。戦争に負けて初めて体力と時間に余裕ができて、机に向かうようになった。勉強どころではなかった私や弟と違って、末っ子の妹は台所の隅に机と椅子が置かれて、そこで勉強していたように思う。やがて成人して姉が嫁ぎ、兄も家庭を持った。夏休みに

は姉も兄も家族ぐるみで客として実家に招待されたりした。接待役を引き受けていた私も結婚。比較的家が近かったせいもあって、私たち夫婦は客扱いを受けたことは一度もないだけでなく、下男下女のように仕事の手伝いにしばしば呼びつけられた。サラリーマンとして工場で働いていた夫は一週間分の疲れを取りたい日曜なのに、私の実家から呼び出されて重いものの移動などの力仕事に感じ「俺はまるで養子扱いだなあ」とぼやいていた。

親からこき使われるばかりで、大切に扱われた記憶がないけれど、あれは国家自体に子供を愛おしむ姿勢がなかったからだと思う。その証拠に国家は少年に対して「よく働きよく学び天皇に忠義、親に孝行を尽くせ」と奉仕の強要ばかりした。つまり大日本帝国時代の子供は大切に慈まれる存在ではなくて、大人に仕える存在だったのである。青年に対してはもっと過酷だった。「天皇のためお国のために潔く死ぬ」これは人道的に見ると大きな犯罪だと今になって私は思う。愛のない為政者に支配される悲劇だ。当時の青少年がいかに惨めだったか、戦後生まれの人にはとうてい理解できないだろう。戦争に負けたことよって日本は見事に変身。アメリカが持ち込んでくれた「自由」「平等」の精神は眩しいくらいに素晴らしかった。人権を尊重

する政治によって女子供をはじめ下層階級が生き返った。児童憲章がつくられ、子供が大切にされる国に生まれ変わったのである。

### 私は相談員

人さまの相談にあずかる「相談員」という仕事があるけれど、なぜか私は中年の頃から友人、知人のあの人この人によく相談を持ちかけられた。

通りすがりに呼び止められて

「山本さん、丁度よい所で会えたわ。ちょっと聞いて欲しいことがあるんだけど、家へ寄って下さらない？」

と玄関へ招き入れられたこともある。

「私は他にも友達はいるけれど、誰よりも山本さんに聞いてもらいたい。あなたにしか打ち明け話ほししない」

と、常々言ってくれる友も何人があった。そういう一人に

「どうして私なの？」

と尋ねてみたら、

「あなたは他言しない人だし、一緒になって真剣に考えて下さるから」

との言葉が返ってきた。「考えて下さるから」ですって？

考えることがここでは喜ばれているのだ。反射的に思い出したのがPTA活動の頃に「山本さんは考え過ぎだ」と言われ、考えるのを喜ばない声があったことだ。

我が子が小学生から中学生だった若い頃のことである。毎年決まって子が学級委員を務めるせいでクラスのPTA委員の役が毎年回ってきてしまうのだ。気が利かなくて世話役には不向きな性格の私はこれが嫌で苦痛でならなかった。逃げたいのだが、選挙の結果だからそれが許されない。私を知らないお母さんたちが自分の子に「クラスの学級委員は誰？」と訊いてその親に票を入れてしまったためだと思う。苦痛なものには理由がある。PTA委員の活動は実に保守的だった。前年度まで引き継がれてきた慣習をそのまま守っていく。事なかれ主義で一步もその道からはみ出ることは許されない。そういう世界だった。

一方、私はいえ、はみ出しっ子みたいに社会に横たわる大方の慣習だの因習だのに疎ましさを感じ、それを改めることに情熱を燃やす人間なのだ。ところが世の中の人には慣習を最良として重んじる。なぜ「より良くしよう、みんなでよく考えて改めよう」としないのか。下手に意見を述べようものなら叩かれかねない世の中。PTAも例にもれず意見が活かされることはあまりない。そうした中で私

が何かを言えば返ってくるのが

「山本さんは考え過ぎる。考え過ぎだ」

という批判だった。PTA副会長に

「昔から引き継がれている流れを止めてはいけない」

と諭されたこともある。

私は決して出しゃばりではなくて、黙っておとなしく控えている人間だったのにどうしてか目立ってしまう。私には何か目障りな存在になりやすい要素があるということだろうか。多分そうだろうと思うようになった。

その私は子育てが終わり、新聞社、保育園、商社と続いたパート勤務からも解放された後、自然の流れのように電話相談員になった。手始めは市の育児相談員。その経験を買われ、続いては区の「高齢者福祉相談員」。その次が「傾聴ボランティア」であった。

福祉相談員というのは、独居ご老人対象に役所から電話器が貸与されている家へ安否を問う電話をかけるシステムである。私が関わった区では対象電話器百四十三台に対して相談員は十七名。同時に福祉会館の二台の電話器を機能させて、週二回、交代制で対応していた。

初めてこの受話器を握った日、私が「何かお困りになっ

ていることはありませんか？」と言ったら、横で立ち聞きしていたらしい館長がひよいと姿を現わし、「そんなこと言ったらあかん、あかん」と手を振られた。私は出過ぎてしまったらしい。

福祉電話に関わっていて、一番印象に残ったのはシモムラというお爺さんのことである。

「ワシはいつもアンタの声を楽しみにしてるんやで」

と言われ、声の美しくない私はヒヤリとしたけれど、私の言うことが楽しいそう。なんと、このシモムラさんが亡くなったのを知ったのは、相談員のうち私だけである。亡くなくても相談員には公表されず、ひっそりとその人の相談カードが取り除かれるだけのシステムになっているからだ。当番の日が来てシモムラさんにいつものように電話をかけたところ、若い男性の声で「父は亡くなりました。葬儀を済ませたばかりです」との言葉が返ってきた。よりによって私がその報告を受けるとは。自分の死を知らせようとしたシモムラさんの強い思いが伝わってきて胸が熱くなってしまった。合掌。

他には、電話中に「私はアンタが一番好きだわ。感じの悪い相談員もある中で」と言っていて私をドキッとさせたお婆さんがあった。相談員を先生と呼ぶ堅苦しい高齢者もある

中でなんとも気さくな言葉だが、そこには個人プレーを求めたい雰囲気を感じられたので、公平を期するためにこの人の氏名は覚えないようにしよう、と私は心に誓った。予感も当たって、やがて「アンタに会いたいから福祉会館へ訪ねて行く」と言いだされ、慌てて「個人プレーは禁止だから」と思い留まらせた。何十人もの中の一入であつても、

そうまで言ってくれる人があるのは相談員冥利に尽きる有難いことに思えた。

自分の性に合っている気がしてずっと続けたかった電話相談であるが、やがて膝の関節を痛めて歩くのが苦痛になったため中止せざるを得なかった。そのうちに膝関節の痛みが治まって階段の昇り降りもできるまでに回復した私だが、次に挑戦したのは、やはりご老人相手の傾聴ボランティアであった。これは直接高齢者の施設を訪問して憩いの時間にホールで三、三、五、五おしゃべり中の高齢者の仲間入りをする仕事である。次はどの人とお話ししようかな、とホールを見渡してみても、一人だけポツンと椅子に掛けている人の横へ自分の椅子を移動させて話相手になったりする。

この傾聴ボランティアの時も深い感動を与えてくれた人がある。カトウリヨウゾウさん。大の読書好きで、施設に

備えてある本はだいたい読み尽くしたというリョウゾウさんと長椅子に並んで座り、少しの間おしゃべりをした。話を終わるなりこの人は突然立ち上がって私に握手を求めてきた。

「今日はあなたに会えてよかった。本当によかった。嬉しい。有難う」と。

いったい何を話したのかまったく覚えていないが、これほど強く感動し喜んでくれた人は他にいない。それっきりで二度と会っていないがお元氣だろうか、カトウリヨウゾウさん。

傾聴ボランティアこそもっと続けようと思っていたのに、これを始めたことによって私は自分の耳が遠くなっていることに気付いた。ご老人の話をきちんと聞き取れない時がある。補聴器を使ってみたが、はかばかしくない。年齢の割に他の人よりも早く耳が不自由になっていったらしい。

原因を考えてみると、学徒動員中に会話もできない工場の騒音と埃の中で働き続けたために卒業後、健康診断に引っかけた抗結核薬ストマイを使用したことが遠因になったと考えられる。騒音も影響しただろう。まさに戦争のせいである。続けたかった傾聴ボランティアも止めねばならなくなつてまことに残念だった。

## 第二部 最近の話

二〇一四年八月、なんともみっともない話だが、私は四人の我が子のうち中の二人を相手取って論争を始めてしまった。

関西や関東に住む我が子たちが、名古屋へ帰省する八月こそチャンス。百済問題を論じようと冒頭から私は口に出していたと子らは言うけれど、自分ではその辺の記憶が定かではない。我が家は狭いからと、会席の場を決めておくように依頼してあった長子が電話で「気まづくなると困るから、百済の話はしない条件で会おう」と提案してきた。実は神社に関する批判をしたことで、すでに私と長女との間が気まづくなっていた。「お母さんはなぜ、うちの神社が悪いって言うの?」「それはこれまで私が書いてきたものを心して読んでいれば分かるはず」「お母さんの文章は説得力が無いから分からない」というようなやり取りを続けたためだっただように思う。

だったら、私にとつては出席する意味がない、とばかり不参加を決めた。そんなことをいわずに・・・と言われて・・・? 時代によっては、活字が世に出ないような(皇室に関わる)内容が入っていますが、これが事実なのか?!と、驚きでした。私たちが教えられた「歴史」、実は都合のよいように刷り込まれているのかも知れない・・・と疑念が湧きます。一つの情報を鵜呑みにせず、違う角度から考えてみる大切さをこの話を読んで感じアテナを高くしなければ、と反省しました。「この人もつまりは『墓標は語る』を鵜呑みにすることを戒めているのである。」

こつこつ調子の赤ペンだった。馬鹿め。私は自分の書いたことが正しいとか真実だと認められたとは言っていないし、思ってもいない。ここでの問題はそんなことではなく、私の文章に説得力が欠けていたならば、これだけの反応(感想)はなかっただろう、と言いたかっただけである。なのに結果は収穫ゼロどころか逆効果。これではもつと細かく自分がこれまでどのような評価を人々から受けてきたかを示すしかない。恐らく娘も息子も初耳だろう(こ)ことを言いたいことを思い出し並べてみると自慢話めいて嫌な気分だが致し方ない。

も拒否。

さて当日の八月十日の食事会の様子については参加した末娘が聞かせてくれた。息子までが私の文に説得力がないと言ったそうだ。我が子の二人までがそう言うのか。私は怒り心頭に発した。怒りっぽいことにかけては人後に落ちない私である。分かんず屋の長女と息子をどうしてくれよう。思索して思いついたのが『琅』25号の私の文に対する幾つかの感想が載った26号の「琅への手紙」の頁を見せることだった。コピーして送った。大学教授はじめ教養ある知識人ばかりの集団が、無学な私を迎え入れて、何人もの人が批評を下さっているんだ、と見せびらかしたつもりだった。

そしたら何と息子も赤ペンをいっぱい入れて返送してきたのである。主だった点を拾い出すと次のようになる。

A 誰一人山本文子の文章を真実だとも正しいとも語っていない。読み物としては興味深いと書いているだけ。  
B 「奇抜な発想」とは書いているが、「冷静な分析」とは書いていない。

C 「山本文子さんの『墓標は語る』を大変興味深く読みました。フィクションなのかノンフィクションなのか。過去に私が人々から受けてきた評価

朝日新聞読者グループの名古屋支部「いずみの会」の会員が百名をかなり超えていた昭和の全盛期に私はその会員だった。そこで私は、「いずみの中で山本文子の文章が一番説得力がある」と複数の会員から言われたり、書かれたりした。「いずみは色とりどりがよい」と題したエッセイは会員の外からまで賞賛の声をもらった。作家業の部外者からも褒められたし、何篇かが好評だった。NHKの文章教室では講師(児童文学新人賞受賞者・浜たかや氏)から受講生十数人を前にして

「この中で作家になる素質のあるのは山本さん一人だけだ」と言われた。その時以来の友人喜代子さんが証人である。ただし、私は別に作家を目指したわけではなくて、単にエッセイを書きたくて受講したに過ぎなかったのだが。もつと遡って小学校時代には男女合わせて七十八名クラスで、一人だけ学級新聞第1号に真っ先に載せられたのは私の作文「妹」だった。これほどあちこちから評価されたことで私は自惚れやになっってしまったのだろうか。

### 歌会始の評価

怒って書いているため喧嘩腰でみっともない文であるけ

れど、この項は息子に送った手紙文の形そのままを載せる。

\*\*\*\*\*  
私を舐めている証拠の一つが歌会始に入選した時の君の言葉だ。  
「あんな幼稚な歌なら俺だって作れる」

そう言った君に私は今さらながら、どうしても歌会始の時の状況を伝えたくなくなってしまった。

歌会始の式典の後に、入選者と五人の選者との懇談があった。席に着くなり代表選者が真っ先に私の名を挙げて褒めてくれた。十人の入選者のうち初詠進は私だけ。他の人は何年も詠進を続けてきて一番短い人で十二年、後は二十年、四十年、と長い。これまでに作った歌の数を言えば私は百二十首くらい。一番多い人は一万余首。他は全員が何千首。大人の中へ混じった幼稚園児だから褒められたのだ、と君は言いたいだろうが。幼稚なのは私も認める。だが幼稚でも、あれはいい歌なのだ。読むとパツと情景が浮かぶ。登場人物の心が伝わってくる。こういうのを良い歌という。それが分からん奴が貶すことになる。「山本さんは先生からえらく褒められたね」

と言って入選者のうち三人が私と仲良しになってくれた。長野県と滋賀県の二人は我が家へ遊びに来てくれたことがあつ

新記録を作った。凄いことです。」

「前癌と癌とは全く異なっており、前癌は転移しない。この時期のうちに発見するといいが、容易なことではない」と主治医からも言われた。

たかが皮膚と軽視してはいけない。私の新婚時代に近所に住む人が皮膚癌で他界した。悔ると手遅れになる。百済問題だって同じである。油断していると、日本の若者たちが戦争に駆り出されて殺されてしまう。

このように、日本人の誰よりも小さな前癌を発見できたのは、私の中に細かいことにこだわる心と目があるからであつて、それは、数々の不思議体験を重ねたことによつて培われたように感じる。先祖の霊が、百済の野望に気づかせ、それを打ち砕く目的のため私に与えてくれた力だろうか。

**私の百済論を裏付ける本**

金容雲『日本イコール百済』説』という本を私が入手したのは自分が百済論をかなり書きまくった後だった。日本という国が完全に百済人に乗っ取られた事実を証明してくれるか、と期待して読み始めたが外れた。日本は昔からそうあるべくしての百済だったような書き方で、日本国民

て、今も文通が続き、『墓標は語る』も送った。二人とも共感の賛辞をくれていた。宮中体験と戦争体験が理解力の基になつているのだらう。もう一人は愛知県人で父の代から短歌同人の編者をしてきて、父の遺志を継いで自分こそ入選したいと詠進を続けること二十年。二十年目にやっと入選できた人。私に手紙をくれて

「あなたのお陰で自分の作歌姿勢の誤りに気付いた。私は言葉を操ることばかり考え続けて二十年もかかってしまった。本当の歌の良さをあなたの歌によつて教えられた」

と。これほど何人も他人様が認めてくれた私の価値を認めない人よ。分かるかい、私の気持ちだ。

\*\*\*\*\*

**私は日本医学会の新記録保持者**

余談になるが、私は日本新記録を持っている。オリンピックには無縁だが、医学界の日本新記録である。全国で誰よりも小さい皮膚前癌（癌になる前の段階）を自分で発見した。そのことを私は岐阜大学病院の部長先生から評価されたのである。

「直径二ミリの前癌、こんな小さなものを自分で見つけたのは、日本でああなたが初めてです。あなたは日本医学会の

と百済人を完全に一体化させており、著者が韓国人であることが肯ける。藤原氏（百済人）に都合のよい形に書き換えられた古事記を鵜呑みに信じて書いているようだ。だが「朝鮮の植民地支配の原因は、白村江の戦の恨みだった」との説は、私と同じである。

いまの天皇が自分は百済王の子孫であると明言された記述もあつて、部分的には私の百済論の裏付けになるところもある。白村江の戦の恨みを持っているのは百済人だけであつて、アイヌ人や琉球人や和人にはそんな恨みは露ほどもない。近隣国とは仲良くしたい。日本の頂点に百済人を据えていることの恐ろしさが、ここにあることを気付かねばならない。天皇も安倍首相も百済人である。百済を滅ぼした唐（中国）、新羅（韓国）との友好を百済人に求めるのは難しかりう。

アジア全域を天皇の傘下に置こうとした百済人の野望が、あの戦争を引き起こした。いままた、安倍首相は同じ道へ戻ろうと躍起になっている。私は何度でも繰り返し言いたい。

平和は百済問題を抜きにしたら実現しないのだ。

**反論者一名共鳴者多数**

私の文に対して「諸悪の根源が百済系帰化人という乱暴な史観にはとても同意できません」との反論者が一人だけあったことを私は『改訂版 墓標は語る』の中に書いた。その反論者は「不戦兵士の会」という妙な名前の平和活動集団の責任者である。ところがおかしなことに、彼の行動は九条の会の発展を妨げているとしか見えない。九条の会の責任者が彼への不信感を露わに示していたことから、私にはピーンときた。かく乱工作員の疑いありだなと思った。妨害工作はまさに百済のお手の物だから、あえて反論一名の存在を本に明記したわけだ。いつの日か尻尾を掴んだら事細かに書き、百済の性悪証拠文にするつもりである。容易に尻尾は出さないうけれど、でも私の考え過ぎかな？

図書館で私の本を読んだと言う人から、時たまだが共鳴の手紙が出版社経由で送られてくることもある。少し前にも「日本が百済人に支配されているとは充分に考えられること、有り得ることです」という文を頂いた。強い共鳴は戦争体験の上に家族が国家公務員採用試験に臨んだなど、特異体験が重なった人に見られがちだ。戦後生まれでは社会科担当経験者、隠された歴史の中に真実を発見した人などである。戦争体験者がいなくなってしまうたら、日本は

賢明な読者はお気づきかも知れないが、決まり悪さをぐっと抑えて第一部、第二部を書いたのは、私がどんな人間であるかをより深く知って頂きたいからである。同じことを言っても、「Aが言うなら本当だろう。Bが言うなら嘘だろう」と式の判断材料を提供する目的だった。Aの評価が頂けるなら、私の百済論は受け入れられる確率が高まる。それを願うことである。

**民族性の違い** 拙著『増補版 私の不思議な体験』から転載

あれは対米戦争が始まった翌年、つまり一九四二年の晩秋だった。稲の刈り取られた田んぼが続く田舎道を、少女の私は歩いていった。

少し離れた田んぼへ、数人の女性がずかずかと入っていくのが見えた。彼女たちは腰をかがめて落ち穂を拾い始めた。そのとき、遠くから所有者らしい農婦の大きな声が飛ん

て来た。  
「おい、田んぼへ入っちゃいかんぞよ」

間髪を入れず、落ち穂拾いの集団の一人が声を張り上げた。

策略家で戦争好き百済人に完全に組み敷かれてしまうのではないか。心配でならない。

**不思議な体験について**

私の不思議体験について息子などは私を教祖呼ばわりするが、それは当たっていない。教祖だの霊能力者だのは自分が霊的な行動を起こす。ところが私は自分から何も起こしていない。金粉をはじめ全てが受け身。誰かが起こす現象をじっと見守って、それをありのまま記述してきただけ。いったい誰が何の目的でこうした現象を起こすのか、とそればかり考え続けた。「金粉は霊界からのメッセージだ」と多くの宗教家（神道以外）が言う。その言葉を信じて、私は自分が霊界からメッセージをもらったと思っっている。そのメッセージとは一体なんだろう、と長い間考え続けてきた。その答えがようやくはっきりした。先祖の霊がテレパシーを送ってくれたのだ。

「百済の野望を打ち砕け」  
ここでもう一度言おう。平和は百済問題を抜きにしたら実現しない。

**第三部 百済問題を論ずる**

「田んぼぐらい何じゃ。日本は朝鮮の国を取ったじゃないか」

私はびっくりした。その数人は朝鮮女性だったのである。何が私を驚かせたかという点、反撃する度胸のある女性を見たのは、それが初めてだったからである。

いまでこそ朝鮮なまりの言葉を耳にすることは滅多にないが、当時は珍しくなかった。この出来事を皮切りに、その後もしばしば朝鮮系の人の強さに目を見張る出来事があった。

その度に、私は不思議に思った。自分の身辺に、あのような強さを持つ日本人を私は知らない。きつい筈の朝鮮人の国を、こんなおとなしい日本人がどうして支配することが出来たのか。おかしいなあ、と私はどうにも不思議だった。

親族の中に朝鮮へ移住していて、敗戦と同時に引き上げてきた一家があった。そこから「朝鮮の人は、気が強い。日本人はおとなしい」と聞かされたことよって、私の不思議に思う心は一層に膨らんだ。

それが今回、日本の国の支配層が実は百済からの渡来人の子孫だったと分かって、いっぺんに私の謎が解けたのである。

自らが温かく迎え入れた、百済王族によって巧妙に乗っ取られ、滅ぼされてしまった初代天皇家のなんとお人好しだったことよ。 (以下省略)

### 神道の正体 1

戦争に負けたことよって、日本国民は確実に幸せになった。当時を生きた一人として私は声高くそれを証言する。ところがある宗教の集会で私は驚くべき発言を耳にした。神道である。あれは数年前かもっと前だったろうか、信者である友人の熱心な勧めに負けて講演会に参加した。行ってみたら驚くことばかり。催し事は公共施設で開かれるのが普通だが、神道の会場は、なんと絨毯の敷き詰められた高級ホテルだった。また、参加者の服装が立派過ぎる。見渡すと服装を正した中高年の男性が過半数を占めている。普通の庶民の集まりとは違う。壇上に立つ男性の第一声がまた凄い。

「戦争に負けて日本は駄目になった。日本を再生させなければならぬ」

と叫んだ。私は驚き呆れた。どう見ても戦争に負けた時はまだ生まれていなかった年代の人がそんなことを言うなんて。明らかに洗脳されている。

籠絡しようと大きな網を張って構えている。日本の青少年よ、騙されるな。

神道に対しても一言いわせてもらおう。

お国のために死ぬる若者を養成するというなら、天皇と同じ血筋の百済人だけに限定してくれ。君たち百済人にとっては祖国を滅ぼした隣国(中国、韓国)との戦争に備えたくてのことだろうから。

### 神道の正体 2

長女が親族揃って神主を副業とする家へ嫁いだだけでなく、私の兄嫁の実家も神道であった。私を神道の講演会に誘った友も神道である。それらとの交流によって私は神道の大きな特徴に気付いた。神道の人たちは血筋へのこだわりが異常に強くて家系を問題にしたがる。

長女の結婚当初に舅に当たる人から、「自分の家は足利尊氏の子孫であり天皇家の血を引く」と説明されたことが記憶に残っている。友人も自分は天皇の子孫だと言っていた。なぜこれほど血筋にこだわるのか。仏教徒の私には奇妙に思えた。

私の生家は、血筋だの家系だのにはまったく無頓着で話題になっただけでもない家だった。ところが兄がお見合いを

靖国神社では国のために死ぬる若者を養成するセミナーを開いているそう。年中行事らしくて、参加人員は百名。セミナーは二〇一四年の今も続いているだろうか。

また神道は新しい歴史教科書を推奨。高校の修学旅行にはぜひ靖国参拝と遊就館見学をと強く勧めていた。

「お国のために死ぬる若者を養成するセミナー」だって？ それこそ軍国主義そのものではないか。神道は右傾の政治団体だったのか。戦死して靖国に祀られるのを最高の榮譽と思わせて日本の若者の命を奪ってきた奴らが復活したというわけか。神道とは百済系朝鮮人が核となった天皇制支持団体であることが明らかとなつたいま、私は敵の根城を見つけた心境である。根城は神道。さらに出城があることも私は知った。それは生長の家。こちらにも、友人の中に数十年來の熱心な信者がいて、縁者や友人の勧誘に全力を尽くしていた。そのしつこさに負けて再度講演会に参加した私の勸では、生長の家は神道の出城に思える。生長の家も、入信すると病気が治る、幸せになると宣伝し、天皇制を諸手を上げて礼賛している。

神道、生長の家ともに「天皇制支持団体」であり、目指すは大日本帝国再建であろう。大日本帝国再建を目指す集団の核は百済系朝鮮民族と考えられる。共に巧みに国民を

しプロポーズをした相手は神道だったため、私の家の血筋を気にした先方の父親(教師)が私の方の家系を調べ上げて「源氏だった」と仲人に報告。結婚をOKされたのである。そのことから初めて私は自分の血筋を知った。これほどまで血筋、家系にこだわる神道って一体何者だろうと私はだんだん気がなってきた。

そんな折に拙著を読んだ人たちがから神道に関わる情報提供を受けた。近くでは知多半島に二つの朝鮮人集落があつて、彼らの気の強さには日本人顔負けだそうで、住民はこぞって神道に属していると聞いた。日本女性との結婚は歓迎されなくて、日本女性と結婚する男性は集落を出て、神社の近くに住もうとする習性があるそうだ。

納得、納得と私が思ったには訳がある。昔私が建てた小さな貸家は神社の参道に面しており、入居させたのが日本名を名乗る朝鮮人だった。言葉も達者なのでそうとは知らずに貸したところ、何力月も家賃滞納を続けたまま居座ってしまった。困り果てて弁護士を立てようやく退去にはこぎつけたものの賃料は未納のままになった。近隣へ我が家の悪口を言いふらしていったそう。町内の役を務める縁者が調べてくれたところ初めて妻は日本人だが夫の方は朝鮮人と判明したけれど近隣の人々はそれを知らない。昔の

ことでは母が朝鮮人詐欺に遭った。夫については同姓同名の日本名を名乗る朝鮮人に不動産を乗っ取られそうになっただがため、夫は改名せざるを得なかった。どれもが、相手は日本人妻を持つ朝鮮人だった。朝鮮人集落の人たちよりも、そこを出た朝鮮人の方が悪質なのだろうか。敗戦の頃少女の私は半島なまりの中年男性から嫌がらせを受けたことがあったりして朝鮮人への恐怖感を植え付けられた。これほどまで虐められた体験を持つために、私はその加害者たちの同族が日本支配者の中心だった、ということが恐ろしくてならない。明治維新は血筋を偽ったこと、暗殺という卑劣な手段による天下取りだったことが怖い。そんな人種に支配されたままでは日本国民や周辺の国が幸せになれるとは到底考えられない。

ヘイトスピーチ解決には、朝鮮人犯罪をなくすることが先決である。朝鮮人犯罪がある限りヘイトスピーチは続くだろう。日本名を名乗っているだけに始末が悪い。

平成のいままた、その一族である安倍首相が大日本帝国復活を目指して暴走を始めた。見過ごせなくて、私は次の形のチラシを作ったから、早速に配布を始めるつもりである。

\*\*\*\*\*  
**隠された日本の歴史**  
\*\*\*\*\*

**日本のヘイトスピーチ**

と言えば、誰もが加害者は日本人としか考えないであろう。日本国民を単一民族だと思っから真相を見抜けないのだ。日本国民というのは、和人、琉球（沖縄）人、アイヌ人、新羅人かと思われる同和、加えて覆面の百濟（系朝鮮）人で構成されている。まずこのことをしつかりと頭に入りたい。次に、明治維新以降の日本は覆面の百濟人に完全に支配され続けてきたことを知らねばならない。

九月一日が来る度に、私は関東大震災の朝鮮人、中国人虐殺事件を思い出す。朝鮮人が暴動を起こしたとのデマを流したのは政府の官憲自身だった。デマに触発された自警団が虐殺に走り、六千人余りの罪のない人たちが殺された。朝鮮民族もまた、新羅人、高句麗人、百濟人で構成され、日本を支配している百濟人にとっては祖国を滅ぼした新羅人、中国（唐）人が憎しみの対象だった。きつかけ作りの手口がまさに満州事変や日中戦争の起こし方そっくりである。つまり、その前哨戦だったわけである。

どれもこれも日本がやった、日本人がやったと国際社会からお叱りを受けてきた。その犯人は和人の仮面を被った百濟人だったのである。気が強くて、何かにつけて日本の土着民を痛めつけてきた朝鮮人（敗戦の頃は半島なまりのため識別が容易）を目の当たりにしてきたために、私たちが世代にはたやすく見抜けるのだ。百濟人が日本を弱肉強食の独裁国家にしてしまった。彼らは戦争と殺人が大好きらしい。

**明治維新以降の日本**

藤原氏と結び、明治維新を起こして天下を取ったのが、鹿児島県と山口県つまり薩長の朝鮮人集落出身者たちだった。その薩長軍団が陸海軍の礎をつくり、日本軍国主義の先達となった。日本を戦争に引きずり込んだ責任は彼らにこそある。敗戦によってしばらく鳴りを潜めていた彼ら百濟人が、平成のいま復活して再び雄叫びを上げ始めた。藤原氏の祖・鎌足は白村江の戦いで指揮をとった百濟王子豊璋その人であり、彼の直系子孫が、日中戦争を引き起こした近衛文麿である。

彼らは明治維新で百濟人の天皇を立てて、神道という天皇制支持団体をつくり、天皇と同じ血筋であることを誇り

とする心で結びついている。睦仁親王とすり替わって明治天皇になった大室寅之祐も、岸信介（安倍首相の祖父）・佐藤栄作兄弟の父祖も、山口県の田布施という朝鮮人集落出身者だった。与えることを「布施」という。日本の土地を横取りして「田布施」と命名。山口、鹿児島両県とも、朝鮮人集落が同じ「田布施」と名付けられたことには、深い意味がありそうだ。

今上天皇は「韓国にゆかりを感じる」発言で、自らが百濟人である意識が強いことを表わした。「勲三等までは朝鮮人が占めている」「出世コースに乗るのは、朝鮮人集落に戸籍を持つ人に限られる省庁がある」といった情報は天皇や安倍首相が百濟人である以上、否定できない。明らかに百濟陣営をより強固なものにするための布石が打たれつつある、ということだ。天皇制が民族差別をつくってしまったのである。百濟人の殆どは日本名を使い、和人の仮面を被っているから始末が悪い。日本の国を清め、高めるためにまずは仮面を外させねばならない。嘘ごまかしのない正直な日本に変えていくための第一歩がそこにある。

『改訂版 墓標は語る』 ダウンロード版 オリジナル・製本用



http://bunai.999.coccol.og-nifty.com/bl/og/2014/08/post-dif4.htm  
文映こと山本文子のホームページ4「日本を考える」  
http://bunai.999.coccol.og-nifty.com  
山本文子『増補版 私の不思議な体験』  
http://bunai.321.coccol.og-nifty.com

2014年9月9日

山本文子（84歳）

賛同者 山本奈実（46歳）

\*\*\*\*\*

### 秘密保護法反対運動の地域差から気づいたこと

反対運動者宛てに拙著『改訂版 墓碑は語る』の発送を始めた私は、秘密保護法反対者の組織の有無が地域によって大きく偏っていることに気づいた。長野県、沖縄県、北海道の三地区が断トツに多い。

ちが、明治以降和人によって痛めつけられた歴史があるが、和人を名乗ったのは百済人だと私は考える。

明治維新の発起人（百済系朝鮮人）たちの本拠地は、言うまでもなく薩長（鹿児島県、山口県）である。明治天皇となった大室寅之祐や、安倍首相の祖父・岸信介とその弟・佐藤栄作の父祖は山口県の朝鮮人集落出身者であり、小泉元首相の父祖は鹿児島県の朝鮮人集落出身者である。鹿児島県と山口県、この二つの県は長野県とは逆に、海に面して渡来人が上陸し、居を構えるに適した位置にある。百済人の城になって不思議はない。ここで言いたいのは、鹿児島県や山口県からは秘密保護法反対の声がまったく挙がっていないことだ（9月現在）。

このように反対運動の区域による違いからも、私には和人、琉球人、アイヌ人对百済人の対立がまざまざと見えてくるのである。言うまでもなく、安倍首相は百済人の代表であろう。

百済人は独特の性格のきつさに加えて、自尊他卑精神を持って他民族を支配し不幸にしてきた。狡くて好戦家の百済人にもうこれ以上支配されたくない。

2014年9月25日

長野県は日本一。ここで考えた。満蒙開拓団を全国一多く送り出して悲劇を生んだのも長野県だった。これはどういふことか。長野県は日本の陸地の真ん中に位置していて、海にはまったく面していない。もしかしたら、渡来民族百済人の入り込まなかった唯一の県だったかも知れない。そのため為政者百済人から真っ先に満蒙へ追い出す対象にされてしまったのではなからうか。

「長野県民の気質は賢くて、温かくて、素晴らしい。国家公務員の父の転勤に伴って日本各地を移り住んだその中で、長野県が一番良かった」

と私に語ってくれたのは、賢さ抜群だった旧友である。領ける。旧友の話に重ねて、今回の運動の激しさを見ると、私まで長野県が大好きになる。賢い土着民の代表に思えてきた。和人の中心は長野県だろうな、と。

沖縄県もまた頼もしい人たち。琉球王国という独立国だったのが薩摩藩（百済人）によって日本に併合させられてしまったのが沖縄県である。戦争末期の住民を巻き込んだ激戦の悲劇は到底忘れることができない。守ってくれるどころか自爆を強要した日本兵たち。これは百済人の指令によって苦しめられた姿である。

三番目の北海道。ここは嘘をつかない善良なアイヌ人た

山本文子（84歳）